

【第七五回例会 関敬吾の口承文芸観】

関敬吾による日本昔話の分類

加藤 耕義

一、関敬吾による日本昔話の分類整理の変遷

本稿は、二〇一八年十一月に行われた第七五回研究会「関敬吾の口承文芸観」での発表をもとに加筆修正したものである。関敬吾による日本昔話の分類整理が、どのような意図を持って行われ、またそれがどのように修正されていったかを、関の分類整理と、それについての関自身の説明を通して、明らかにすることを目的とする。

関敬吾による昔話の分類整理は出版物によって四回示されている。

一回目は『日本昔話集成』（以下『集成』（一九五〇—一九五八）で、全十六巻を編纂する中で行われた配置が、分類とって提示されている。

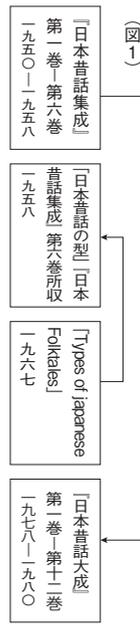
二回目は『集成』第六卷（一九五八）の末尾に付された「日本昔話の型」で、これは『集成』の配置とは異なった分類であ

り、話型記述を伴う、いわゆる話型カタログである。

三回目は“Types of Japanese Folktales”で、南山大学発行の“Asian Folklore Studies Vol. XXV”（一九六六）という雑誌に発表された話型カタログで、これは右記「日本昔話の型」を元に作られた英語の話型カタログである。

四回目は『日本昔話大成』（以下『大成』（一九七八—一九八〇）全十二巻で、これは『集成』と同じ分類で、新話型が加えられている。

関敬吾によるこの四回の分類は二種類に分けることができる。



『集成』と『大成』が共通している、一九五八年の「日本昔話の型」を“Types of Japanese Folktales”が共通している。

まず『集成』と『大成』の共通点と相違点を確認しておく。

『集成』と『大成』の説話の並び順と説話番号は共通している。つまり「動物昔話」「本格昔話」「笑話」という大分類の下に、「動物葛藤」「動物分配」「動物競争」などの下位区分があり、その下に「一、魚泥棒」「二A、尻尾の釣り」「二B、尻尾の釣り（人と狼）」……と続くが、この大分類の並び順、下位区分の並び順、各説話の並び順と番号も共通している。ただし、下位区

分の番号は、『集成』ではたとえば本格昔話「十一、婚姻・美女と獣」「十二、婚姻・異類女房」…と通し番号であったのが、本格昔話「一、婚姻・美女と異類獣」「二、婚姻・異類女房」と大分類ごとに、新たに番号を振るようになった。

その他の変更点としては、『集成』の最後に追加された「補遺」およびその後の追加は、「新話型」としてそれぞれの大分類の下に振り分けられた。たとえば、「動物昔話」では、「十、動物由来」のあとに、「十一、新話型」として、「動物新一、欲張り犬」という形で、最後にまとめて加えている。

この追加はそれほど多くない。このことについて関敬吾は、『大成』十一巻の最後に「『集成』から『大成』へ―跋文にかえて―」で次のように書いている。

最初、『集成』の分類に利用した話数は約八千七百であった。これから抽出したタイプはおよそ六五〇であった。今回の『大成』に用いた話数は正確に計算していないが、およそ三万四、五千ぐらいではなかったろうか。それにもかかわらず、新話型として追加しえたものは九〇〇ぐらいである。しかも一例（夫婦の縁）をのぞいては、その類話はきわめて少ない。『集成』以降実に膨大な資料が蒐集されたにもかかわらず、この事実は何を意味するのか。¹⁾

次に「日本昔話の型」の「Types of Japanese Folktales」の共通

点と相違点を確認したい。『集成』の第六巻に掲載された「日本昔話の型」は後に見るように、『集成』の分類とは異なるものである。この「日本昔話の型」と英語版と比べると、話型の配列はまったく同じである。たとえば最初の部分を見てみると、「一、動物の起源」は「一、ORIGIN OF ANIMALS」で、そのグループの話型は「一、時鳥と兄弟」は「一、Hotoogisu Brothers」となっている。以下も対応しているが、「十一、時鳥と包丁」「十二、時鳥と小鍋」「十三、時鳥と計算」は英語版には採用されていない。したがって、「十四、片脚脚絆」は英語版では「十一、Only One Leg with Legging on」となっており、番号が繰り上がって十一番になっている。つまり、英語版に採用されなかったものは飛ばして番号付けがなされている。

この英語版を出版した目的について、前書きには次のように書かれている。

一、目的 過去五十年の間に、日本の民間伝承はほとんどすべての地域から集められてきた。これらの説話は科学的研究の目的で、民俗学者によって調べられ、分類された。それでも、科学的研究に利用可能なテキストはヨーロッパ言語にほとんど翻訳されてこなかったし、ヨーロッパの学者に紹介されることはほとんどなかった。この理由から、民間伝承研究の分野における日本の資料は比較研究において見過ごされてきた。本誌はその隙間を埋めることを目的

とする。⁽²⁾ (筆者訳)

つまり、これまで国際的に知られていなかった日本の昔話とその全体像を紹介するということを目的としている。その際、『集成』の分類ではなく、「日本昔話の型」の分類を翻訳したということから、「日本昔話の型」のほうが日本の昔話の体系を紹介するにふさわしいと考えたことがうかがえる。

二、『日本昔話集成』の分類の目的と方法(アールネ/トム ソンの分類 (AaTh) との比較)

『集成』分類の目的について、関は『集成』第一巻の序説の冒頭「一、昔話の概念」において次のように述べている。

昔話の存在は単に一民族的な現象ではなく、超民族的な事実である。従って昔話の研究は特に比較研究を予想するものである。このことなしには昔話の本質は明らかにすることは不可能である。従来の研究の課題もまた、昔話とは何ぞやという本質論以外に、それはいつどこで発生したか、諸民族間に何故に類似または同一の昔話が存在するかという事に集中されていた。現在では更にその発生または存続の社会的・民族心理的問題、爾余の文化特に伝承文化との相互関係の問題もまた重要な課題としてとりあげられな

ければならない。それらの諸問題の解決は極めて広汎な基礎の上に於いてなされるべきことが当然に要請されるが、これは将来の課題として残される。本書編纂の目的の一つもまた比較研究問題の解決に寄与せんがためになされるのである。我々はおかろ立場に於いて、現在までの調査の結果に基づいて、我が国の昔話には如何なる型が存し、それが如何に分布し、他民族と如何に類似するかを先ず明らかにしなければならぬ。⁽³⁾

つまり、冒頭から昔話の国際的な比較研究に寄与するための話型分類を目的としているということが明確に述べられている。同様のことが、「序説三、昔話の分類」においても述べられている。

昔話の採集が恣意的段階より一定の総合的研究の段階に進み、或はその採集量がある程度に到達すれば、当然に分類が問題となる。分類の目的は昔話の相互関係の有無を明瞭ならしめる点にあることはいうまでもないが、本質的には研究の単なる手段ではなく、ある意味に於いては一つの到達点でもある。それ故に昔話研究の目的乃至はその方法に従って、その分類の基礎もいくつかり得ることは勿論である。昔話を歴史的發展段階に配列することもまた一つの重要な課題であるが、これは個々の昔話分析と比較検討

の後に始めて可能であつて、現段階に於いては未だ個々の昔話の研究範囲に止まり、総合的に歴史的に秩序づける段階に達していない。従つて現在に於ける昔話の分類は比較研究の一つの手段に過ぎない。⁴⁾

関は、フィンランド学派が目指していたのと同様に、地域的のみならず歴史的な話型の分類整理を一つの到達点として想定していたが、それは将来の目標であるとし、その前段階として国際的な比較研究に寄与する話型分類を目標としたことがわかる。

次に『集成』での分類方法について、やはり「序説」の記述から見てみたい。

吾々の分類は必ずしもアールネ・システムに従わない。全体的には前に述べた如く、動物昔話、本格昔話、笑話の三つに分かつが、個々の分類は機能的に関連する一群の昔話に総括し、而して個々の型に従つて配列した。

関はさらに、『大成』第二巻の序で、『集成』を編集する際に主として、「アールネの分類」、エーバーハルトの「中国昔話目録」「トルコ昔話目録」、および、ジユドウの構造分類を参照したと述べている。その中でとくにアールネについて書かれている部分を引用する。

もちろんこれらの分類をただちにわれわれの分類に無批判に採用することはできない。たとえば、アールネの分類はすぐれたものではある。彼は動物昔話の低位分類は七項目に分けているが、初めの四項目(1)野獣、(2)野獣と家畜、(3)人と野獣、(4)家畜がこの分類の中核をなすものである。これがはたして動物昔話をいかに研究するための分類であるかの理解は困難である。西欧の学者もこれは動物学的ではなく、まして民俗学的でもない」と批判している。「集成」にはしたがつてこれはほとんど参考にしなかつた。⁶⁾

ここで言われているアールネのシステムとは、集成の参考文献によれば、一九二七年のアールネ／トムソンの話型カタログである。アールネ／トムソンのカタログと関の『集成』の配列を比較すると、図(2)の様になっている。関の批判を別の例で説明するなら、アールネの動物昔話の「野獣」には、「二一六九、キツネ」狡猾な動物」「三〇一三五、穴からの救出」「七〇一九九、キツネ以外の野獣」となっている。「二一六九、キツネ」狡猾な動物」は、狡猾な動物としてキツネが登場する説話群であり、「特定の動物の性質」によってまとめている。「三〇一三五、穴からの救出」は動物同士が穴から救うモティーフを含む説話群であり、「モティーフ」によってまとめている。「七〇一九九 キツネ以外の野獣」はウサギやライオンなどが登場す

る説話群であり、「動物の種類」によってまとめられている。「特定の動物の性質」「モティーフ」「動物の種類」と分類の基準が統一されていない。それに対し『集成』は「機能的に関連する一群の昔話」をまとめたとは関は述べている。具体的にみると、「動物葛藤」「動物分配」「動物競走」と続くので、関の言う「機能的に関連する一群の昔話」とは、特定のモティーフ、またはテーマを分類基準としていていると思われる。(図2)

なお、『集成』の「動物昔話」の最初は「一、魚泥棒」「二、しっぽの釣り」から始まる。その点はアールネ／トムソンと共通している。関はこれらの説話を「動物葛藤」として整理している。

アールネ／トムソンの話型カタログ			日本昔話集成		
I. 動物昔話	野獣	キツネ=狡猾な動物 穴からの救出 キツネ以外の野獣	動物昔話	1 動物葛藤	
	野獣と家畜			2 動物分配	
	人と野獣			3 動物競走	
	家畜			4 動物餅競争	
	鳥			5 猿蟹合戦	
	魚			6 勝々山	
	その他の動物			7 古屋の漏	
		8 動物社会			
		9 小鳥前生			
		10 動物由来			
II. 本格昔話	A. 呪的物語	超自然的反対者	本格昔話	11 婚姻・美女と獣	
		超自然的または呪力のある夫(妻)およびその他の関係者		12 婚姻・異類女房	
		超自然的課題		13 婚姻・難題罨	
		超自然的援助者		14 誕生	
		超自然的対象物		15 運命と致富	
		超自然的力または知識		16 呪宝	
		その他の超自然的契機		17 兄弟譚	
	B. 宗教的昔話			18 隣の爺	
	C. 小説的昔話			19 大歳の客	
	D. 愚かなる悪魔の昔話			20 継子譚	
		21 異郷			
		22 動物報恩			
		23 逃竄譚			
		24 愚かな動物			
		25 人と狐			
III. 笑話	愚か村		笑話	26 愚人譚	A 愚か村
	夫婦者				B 愚か智(息子)
	愚か嫁(娘)				C 愚か嫁(女)
	愚か者(息子)				D 愚かな男
	嘘話			27 誇張譚	
	形式譚			28 巧智譚	A 業較べ
その他		B 和尚と小僧			
		29 狡猾者譚	A おどけ者		
			B 狡猾者		
		30 形式譚			
		補遺			

図 2

しかし、関の述べているとおり、ほかの説話については、アールネの番号にとらわれずに、日本の昔話の実情にあわせて整理している。アールネのシステムと大きく異なるのは、アールネは「人と野獣」を「動物昔話」に入れていた点である。たとえばAT一五六「ライオンの前足からとげが抜かれる」と『集成』の「二二八、狼報恩」は類話関係にあるが、関はこれを『集成』の「本格昔話 十、動物報恩」に入れていた。つまり関は「動物昔話」は動物だけの説話として整理したことが見て取れる。

本格昔話の核をなすのは、アールネ／トムソンでは魔法昔話（『呪の物語（関訳）』である。アールネ／トムソンでは「AT三〇〇、竜退治」など、超自然的敵対者（『超自然的反対者（関訳）』からこの本格昔話は始まるが、『集成』は「二〇一A、ヘビ婿」など「婚姻・美女と獣」から始まっている。動物婿は、ヨーロッパではたとえば「AT四四〇、カエルの王様または鉄のハイシリヒ」にあるように、魔法にかけられて動物になっていた夫と結婚する説話が多いが、これは日本の昔話の実情とは異なり、日本のヘビ婿は魔法にかけられた人間ではなく、動物である。したがって、人間と動物の関係が語られているという観点からは、日本の昔話においては動物昔話の次に来ることは理にかなっている。

『集成』の「本格昔話」にある「二四、愚かな動物」には「二五三A、猫と釜蓋」、「二五五、猫の踊」、「二五六、猿神退治」などが含まれる。この「愚かな動物」という見出しについて関は『大成』第七巻で次のように説明している。

この章は愚かな動物の名称のもとに一括した。そのときの意図は人が動物に優るために、両者の葛藤は究極は動物が敗北するということを主題とした話を集めた。「愚かな動物」という標目はアールネの名称と一致するが、アールネが当初利用した資料はスウェーデンのオスカア・ハックマンが「ポリュフェーモス」(M1125; 1137) 研究のために収集した材料に基づいたものである。この話は我が国にはまとまった資料はほとんどなく、今日一例しか見られない。したがってこの項の意図はほとんど理解されなかったようである⁷⁾。

ここで言われている「アールネの名称」とは、アールネ／トムソンの「愚かな鬼」であろう。たとえば「AT一〇三〇、収穫の分配」や、「AT一〇八三、長い棒とこん棒での決闘」など、悪魔より狡猾な人間が悪魔を騙して勝つ説話群である。したがって内容的には『集成』の「愚かな動物」は、アールネの「愚かな鬼」に比べ、「愚か」ではないので、おそらくそうした指摘があったのだろう。ただ、関は人間に敗北するという点でこの表題を保持したようである。

笑話についても、分類はアールネ／トムソンのカタログより、細かくなっている。まず共通しているのは、次の二項目である。関は「二六、愚人譚」の見出しのもとに「A、愚か村」「B、愚か髯（息子）」「C、愚か嫁（女）」「D、愚かな男」と分けてい

る。これがアールネ／トムソンの笑話の中の「愚か村」「夫婦者」「愚か嫁(娘)」「愚か者(息子)」に対応している。そして「二七、誇張譚」が、アールネ／トムソンの「嘘話」に対応している。それに加え新たな項目として『集成』では「二八、巧智譚」「二九、狡猾者」が設けている。「五一五、話千両」「五三三A、親捨て山」「五三三、飴は毒」などが巧智譚に含まれ、「六一六、馬の皮占」「六一八、俵薬師」「六二二、金ひり馬」などが「狡猾者」に含まれる。

全体を見ると、関の分類は、関の述べているとおり、アールネの分類をあくまで参考とし、日本の昔話の実情に則して整理したことが確認できる。

さて、関がこの分類をつくるにあたって、どのように作業したかについて、小澤俊夫の二〇一三年の講演録には、次のように述べられている。

「これほどのたくさんの資料をどうやって整理したんですか？」と聞いたら、「本をかならず2冊手に入れた。そして破いて紙に貼り付けていった。両面に印刷されているから2冊ないとできない。」⁸⁾

このように、たいへんな苦勞をして、類似のものを並べてつくられたのが『集成』の分類になる。したがって、『集成』全体ができたときには、見直しが必要となる点がでてきたことも想

像に難くない。

三、『日本昔話集成』から「日本昔話の型」へ

『集成』第一巻が一九五〇年に出版され、第六巻が完成するまでには八年の歳月がたち、その第六巻には、『集成』の配列とは異なる「日本昔話の型」が発表された。これについて、関は次のように述べている。

この巻の最後に、日本昔話の総括として「昔話の型」をあげておいた。これによって二応日本の昔話の類型とそれらの相互関係を簡単に知ることができるよう。その配列の仕方は必ずしも本文とは一致しないが、現在、わたしが考えている日本昔話の一つの分類案である。将来、さらに改訂されるべきであるが、一応これに従っておく。⁹⁾

つまり、八年の経験を経て新たな案が生まれたということになる。このことは第五巻「自序」からも読み取れる。

この巻には笑話を集録する。このなかにはいわゆる本格昔話に属すると思われるものも多少ある。第一部・第二部にも笑話がいくつかはいつている。これは本書の編纂をはじめてから、その間四年ばかり中絶期はあったが、約八年の

時を経たために、編者自身の昔話全体に対する見通しが変
化し、さらに個々の昔話の解釈が変わった結果でもある。¹⁰⁾

また、『大成』第十一卷の「『集成』から『大成』へ―跋文に
かえて」には、当初の分類については知識が不十分であったと
いうことが、次のように書かれている。

実際は、しかし昔話分類の仕事はそう安易なものではな
く、長い準備が必要であった。第一、モティーフとタイプ
の関係の知識すら、当時は不十分であった。タムソンの英
訳版では動物昔話、笑話はほとんど単一のモティーフが同
時にタイプであった。これに対して本格昔話は多くのモ
ティーフから構成されている。これがまた構造上からの話
種決定の要因で、これを基準に柳田は昔話を派生昔話と完
型昔話の二つに区分した。ところが、わが猿蟹合戦、かち
かち山は動物昔話といわれているが、典型的な複合形式で
ある。笑話のなかにもいくつもかかる複合形式がある。

そうした初歩的な、しかし基本的な概念に対する知識な
しに分類をはじめたことは無謀であったというほかはない。
そのための後遺症は『集成』だけではなく、今回の『大成』
のなかにも払拭することができないで残されている。¹¹⁾

したがって、『集成』が完成する段階にきて、不都合な点が見

えてきたために、作り直した配置の案が、「集成」第六巻に収め
られている「日本昔話の型」と言える。

それでは、なぜ『大成』で新たな、整理に従わなかったのか、
これについては小澤俊夫補訂『日本昔話の型』のまえがきに次
のように書かれている。

私は關先生が亡くなられる二年ほど前に、先生に質問した
ことがある。「先生はこれまで三回、日本昔話カタログを作
られましたか、これからの日本の昔話研究ではどれを使うの
が一番いいと思っておられますか？」すると先生はすぐに、
「そりゃ、昔話の型だよ」と言われた。「だがあれを作ったと
きには、もう集成が世の中に広がっていて、みんな集成の番
号で整理していたから、そのままにしておいたのだ」¹²⁾

関自身も『大成』第二巻の序で次のように述べている。

わたしは「集成」は比較研究の立場からわが国の昔話を研究
することに目的をもって編集したものであった。今日膨大な
資料が集積されたので、これを補充する際に「集成」の分類
体系にテーマの概念を導入して大幅に訂正することを考え
た。しかし、「集成」の分類にしたがってカードを整理して
いる研究者が少なからずあることを知ったので、従来のまま
とした。ただし、個々の話の配列だけは南から北の順序にな

らべかえた。これは、わが昔話が朝鮮、中国、南方からより多く移入されたるうという仮定によるものである。¹³⁾

つまり関は、配列を見直して、「日本昔話の型」に並べ替えたかったが、断念したということがわかる。

また例会で指摘いただいたこととして、『集成』が八年かけて六巻が出版されたのに対し、『大成』はわずか二年の間に十二巻を出版するという時間的な制約もあつたということも、時間をかけて、新しい配列に変えられなかつた事情のひとつであるとのことである。

四、『日本昔話集成』と「日本昔話の型」の比較

四一 三分類の廃止

関は、「日本昔話の型」では「動物昔話」「本格昔話」「笑話」の三分類を廃止している。

関は早い時期からこの三分類に疑問を持っていたようで、すでに『集成』第二巻の自序で、三分類について次のように書いている。

グリムがすでに昔話と伝説とは区別したが、現在の物語形式の様式批判からすれば彼の区別だけでは不十分である。昔話は更に三つの群に分類されるが、グリムの昔話の中にも動物昔話、笑話、伝説が混在している。これらをモティーフの点

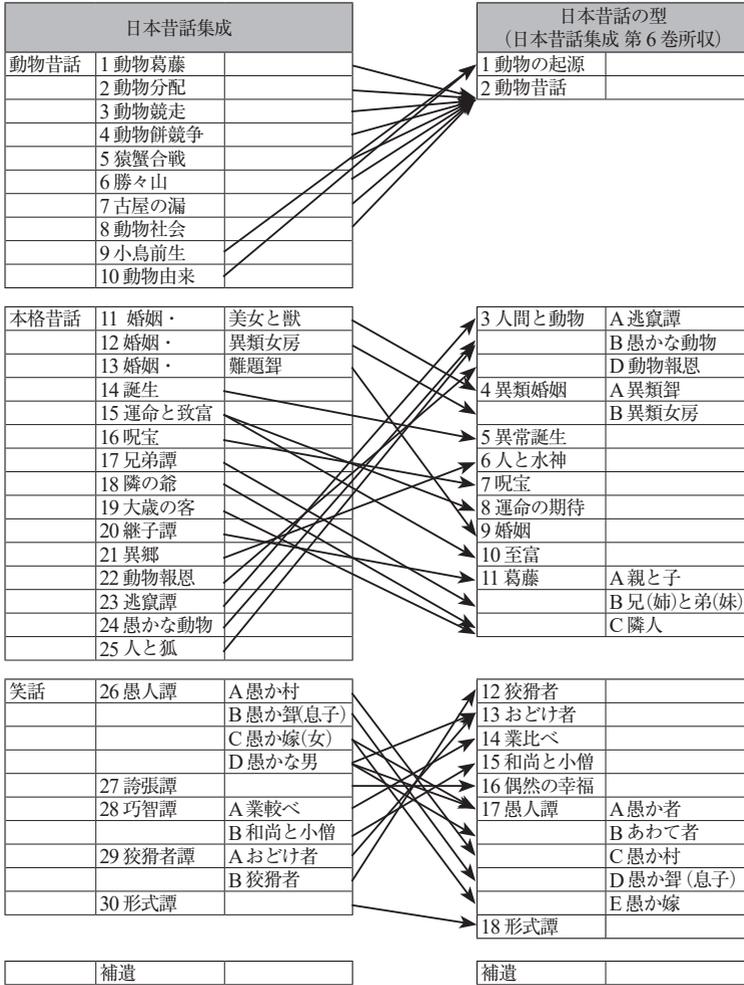
から見ればこの三つを厳密に区別することは困難である。動物昔話は行為者として動物が主体となり、その行動が本質的な特徴をなしており、笑話は行為者の愚行が話の中心となり、笑いを目的として語られる。これらはその構成が単純で、モティーフは単一である。本格昔話はいくつかのモティーフの結合によって成立するが、これら三つは往々にしてモティーフを等しくするものがある。本格昔話にもしばしば動物が主要なる行為者として現れ、また笑の要素も決して少なくない。笑そのものは本来極めて主観的であり、歴史的・社会的条件によってその内容は変化する。(中略)ここにますますその三者の区別は困難の度を加える。¹⁴⁾

また、『集成第三部笑話一』の前書きでもふたたび次のように述べている。

ここにいう笑話がいかなる種類の話であるか、動物昔話、本格昔話といかに相違するかということは、研究者によって必ずしも同一ではなく、また定説もない。笑話という言葉の意味からすれば、語り方によって本格昔話が笑話ともなるうし、笑話が事実譚ともなりうる。¹⁵⁾

つまり、この三分類が、明確な分類の基準として機能していないということを早くから指摘していた。三分類はむしろ昔話

「日本昔話集成」の分類と「日本昔話の型」の分類配置の対象表 図3



の実状に合わないと考えて、削除したことがうかがえる。ハンスライエルク・ウターも、アアルネ／トムソンの話型カタログを二〇〇四年に改訂した際、この三分類を廃止している。

四―二「集成」と「昔話の型」の比較
次に個々の変更について見ていきたい。図3には全体で主にどのように変更しているかを示した。

「二、動物の起源」「二、動物昔話」

まず、「集成」で「動物昔話」に分類されていたものから見てみたい。「昔話の型」では、動物昔話の「小鳥前生」と「動物由来」を最初にもつてきて、あとはみな「動物昔話」にまとめている。小鳥前生とは、関の説明では、「ある理由によって死んだ人間が、小鳥になったという一群の由来譚である」¹⁶⁾。それに続くのが、「動物由来」である。動物由来は関によれば、「小鳥その他の動植物の生成、形態の理由を物語るものである」。

『集成／大成』ではアールネ／トムソンと同様、「魚泥棒」「しっぽの釣り」から始まっていた。これについて、関は『大成』第一巻「動物昔話の序」の中で次のように述べている。

魚泥棒 (AT 1)、尻尾の釣 (AT 2) を『集成』の劈頭において動物昔話の分類を試みたが、これをヨーロッパ的だと評した研究者もあった。これらの話はギリシア寓話のなかに見られ、わが国では少なくとも文献の示すところによると文禄二年 (一五九三) に天草において「日本の口」にうつして刊行されたものである。尻尾の釣はこのなかに他の寓話と結して見られ、今日ほとんど全国に分布し、その記録は最も多いもののなかの一つでおそらく口頭を主として分布したのではなからうか。動物分配譚の四つの変形はこの話をもとにして変化したものではなからうか。この意味においてこの話を最初に置いたのである。この巻の新話型としてあげたものはほとんどギリシア寓話のなかに求められる。しかもこれらの話は寓話性がほとんど省略され、日本の動物譚の根幹となっている。もしこれらを外来種として除いたら日本には動物昔話はないことになる。¹⁷⁾

つまり関は、これが日本の昔話として定着しており、また他の動物分配譚の元となっているとも思われるので、動物昔話の最初に掲げることの問題がないことを述べている。

それでは、「昔話の型」ではなぜ、「小鳥前生」を持つてきたのであろうか。これも次の記述からある程度読み取れよう。

いま一つは桜井徳太郎君の見解である。関は『集成』においてジャンルとしての動物昔話を、(1)動物葛藤、(2)動物分配、(3)動物競争、(4)動物餅乾競争、(5)猿蟹合戦、(6)勝々山、(7)古屋漏、(8)動物社会、(9)小鳥前生、(10)動物由来の一〇項目に分類 (arrangement) した。これを要約すると、A 葛藤譚、B 親和譚、C 由来譚になるという。ここにいう A・B をアレジメントの原理と私は理解する。言葉を変えていえば、A・B は戦争と平和ともいえる。この原理は素朴な弁証法で、人間生活を喧嘩型と交友型に基づいて解釈しようとした。しかし、その結果がどうであったか。昔話の研究史は知る者には明かである。桜井君の二元論はあまりにも原理的すぎて、実証科学の分類基準にはしがたい。さらに彼のいうところの由来譚は、A・B とはまったく違った概念に属すると私は考える。むしろ、これはジャンルで、柳田における小鳥前生、動物由来譚 (aetiological tale) である。われわれ昔話を歴史的観点から研究しようとする者は、その研究目的にそっていかに分類した方が最も有効であるかにつねに苦しんでいる。もちろん『集成』の分類に決して満足しているものではない。¹⁸⁾

つまり、動物昔話の他の項目と比べて、「小鳥前生」と「動物由来」だけ、ジャンルとして異なると指摘している。このジャンルの違いを「昔話の型」では明確に示し、最初に「小鳥前生」「時鳥と兄弟」「雀孝行」などと「動物由来」(「梟紺屋」「雲雀金貨」など)を持ってきて、残りを動物昔話にまとめたことになる。動物の由来が最初に置かれ、次に動物社会の説話が置かれるという順番は、理解しやすい。

その他の動物説話を見ると、『集成』で細かく分けていたグループをすべて動物昔話にまとめている。そもそも動物葛藤と分配と競争など、いずれも葛藤であり、分類は困難である。そして「昔話の型」での「動物昔話」内の配列は、『集成』のときの見出しを付けて示すと、例外はあるもののだいたい次のようになっている。

- 集成一、「動物葛藤」(「魚泥棒」「尻尾の釣」等)
- 集成二、「動物分配」(「狸と兎と川瀬」等)
- 集成三、「動物競争」(「田螺と狐」「十二支由来」等)
- 集成四、「動物餅競争」(「猿蟹餅競争」「猿と暮の餅泥棒」等)
- 集成五、「猿蟹合戦」(「猿の夜盗」「猿と蟹の寄合田」等)
- 集成八、「動物社会」(「鼠と鼯の寄合田」「猿の生肝」等)
- 集成六、「勝々山」(「勝々山」)
- 集成七、「古屋漏」(「古屋漏」)

集成八「動物社会」が集成五「猿蟹合戦」の後に来ているが、

『集成』の並びからは大きな変更はない。

- 「三、人間と動物」「四、異類婚姻」「五、異常誕生」「六、人と水神」「七、呪法」「八、運命の期待」「九、婚姻」「十、至福」「十一、葛藤」

『集成』で「本格昔話」にまとめられていたものは、「昔話の型」では大きく順番が変更されている。

「三、人間と動物」

順を追って見ていくと、動物昔話の次に置かれたのが「人間と動物」である。「A逃竄譚」「B愚かな動物」「D動物報恩」として、「人間と動物」にまとめられている。並び順としては、敵対的な存在として、脅威となる動物、人間に負ける動物、そして親和的な動物という順に並べられている。前の「動物昔話」から見ると、動物同士の説話から、人間と動物の説話へ、しかも敵対的な存在として動物が現れる説話から親和的な動物が現れる説話へと、段階的にスムーズにつながっている。

ただし、「動物昔話」からの流れということでは、必ずしもスムーズと言えない点もある。逃竄譚の説話を見ると、「三枚の護符」「鬼を一口」「耳切団一」「牛方山姥」「食わず女房」「天道さん金の鎖」「姉弟と山姥」「鬼の子小綱」「鬼の子小綱」「鬼と賭」「妹は鬼」「旅人馬」「油取り」である。つまり、動物ではなく山姥や鬼など超自然の敵対者が登場する。関は逃竄譚を「人

間と動物との交渉を主題。動物その他の怪物に、人間が追い詰められることを中心とした昔話である」と説明しており、「動物」と「その他の怪物」を区別していないことがわかる。

次に置かれている「愚かな動物」を関は次のように説明している。「人間と動物との交渉を主題。前者が人間の逃亡にあるとすれば、この方の昔話はむしろ動物が人間に支配され、征服される型のものである。」ここに含まれるのは「鍛冶屋の婆」「猫と茶釜」「猫の踊」「猿神退治」などである。こちらは、「動物」と「その他の怪物」との中間に位置するような存在が多い。また、『集成』で「一五、人と狐」としてまとめられていた「尻のぞき」「髪そり狐」など一連の狐の説話もここに含まれている。

その次に置かれているのが「報恩譚」である。「狼報恩」のように自然動物が登場する話もあり、また「枯骨報恩」のように死者の霊であることもあるし、また「分福茶釜」のように、化ける力を持った動物であることもある。日本の昔話を見ると、『集成』で「本格昔話」にまとめられた動物については、自然動物、超自然の力を備えた動物、超自然の存在を区別するのが難しいことがわかる。そこで関は「誰が行うか」ではなく、行われる内容、関が「機能」と述べた「モチーフ」や「テーマ」によっての分類をしていることがここでも見て取れる。

「四、異類婚姻」

そのあとに異類婚が続く。『集成』での「婚姻・美女と獣」と

いう見出しは「異類贅」に変えられた。これにより、類話としては関係のない「美女と野獣 (ATU425C)」が連想されることはなくなつたし、また次にくる「異類女房」とのバランスからも、よりふさわしい見出しとなつている。

「五、異常誕生」

「異類婚」のあとに「異常誕生」が来るのは『集成』のときと同じである。『集成』では「誕生」という見出しだったが、「異常誕生」となり、わかりやすくなつた。「異常誕生」は「田螺息子」「蛙息子」「一寸法師」という順で始まるが、異常誕生の動物、または小さ子が、人間の女と結婚するという点で、前の異類婚姻譚からの繋がりがよい。続く「拇太郎」「手斧息子」から「桃の子太郎」まで、特に婚姻はテーマとなっていない。

「六、人と水神」

「異常誕生」のあとにくるのが「人と水神」である。『集成』では、「異郷」という見出しであったが、ここに含まれるのは「竜宮童子」「浦島太郎」「沼神の手紙」「黄金の斧」「玉取姫」の五話型であり、「人と水神」として明確になつた。

「七、呪法」

「人と水神」は、水中の世界に行つて、何かの宝を得る説話が多いが、続く「呪宝」も宝をなんらかの方法で授かり、それが

どのように使われるのかに興味を持って語られる説話である。「聴耳」「犬と猫と指輪」「塩ひき臼」「若返りの水」などがある。

「八、運命の期待」「九、婚姻」「十、至福」

次が「運命の期待」である。「集成」で「運命と致富」に分類されていたものが、「運命の期待」と「至富」に分けられ、「運命の期待」↓「婚姻」↓「至富」という順で並べられている。含まれる話型は以下のとおりである。

《運命の期待》

「炭焼長者」「甕長者」「産神問答」「子供の寿命」「芋掘長者」

「酒泉」

《婚姻》

「絵姿女房」「百合若大臣」「蕪焼長者」「嫁の輿に牛」「ぼっこ

食い」「蛸長者」「博徒聾入」「蜂の援助」「娘の助言」「播磨糸

長」「謎解智」「山田白滝」

《至富》

「藁しべ長者」「夢見小僧」「山神と童子」「夢買長者」「だんぶ

り長者」「味噌買橋」「天福地福」「金は蛇」「牡丹餅は蛙」「取

つく引つく」「おぼっしょ」

並べてみると、傾向としては「運命の期待」には、超越的な力が定める運命に対して、それがどう実現されるか、回避されるかがテーマとなる。「婚姻」では身分違いの結婚が実現する

「運」がテーマとなるものの、「博徒聾入」にあるように、必ずしも超越的な力が介在していない。「至富」では、「藁しべ長者」のように超越的な力が介在せず富をつかむ説話もあるが、「夢買長者」のように、夢のお告げという超越的な力が介在するものもあり、「運命の期待」と「至富」の境界はあまり明確ではない。おそらく、個々の説話の細かい入れ替えまでは深く手をつけていないためであろう。

「十一、葛藤」

そして次に「葛藤」が来る。「葛藤」は「A、親と子」「B、兄（姉）と弟（妹）」「C、隣人」に分けられる。それぞれ次の説話が含まれている。

《A、親と子》

「米福粟福」「米埋糠埋」「皿々山」「お銀小銀（お月お星）」「手無し娘」「姥皮」「鉢かつぎ」「灰坊」「継子の栗拾い」「継子の苺拾い」「七羽の白鳥」「白鳥の姉」「継子と鳥」「継子と笛」「唄い骸骨」「継子の釜うで」「継子の蛇責め」「継子と井戸」

《B、兄（姉）と弟（妹）》

「三人兄弟」「五郎の欠腕」「馬鹿でも総領」「なら梨取り」「二人兄弟」「犬頭糸」「漁夫と釣針」「姉と弟」「米良の上漆」「兄弟の仲直り」「山賊の弟」

《C、隣人》

「地藏浄土」「鼠浄土」「雁取爺（花咲爺）」「鳥吞爺」「竹伐爺

〔屁ひり爺〕「舌切り雀（腰折雀）」「蟹の甲」「瘤取爺」「猿
蔵」「見るなの座敷」「猿長者」「宝手拭」「親を棄てる」「大歳
の客」「厄病神」「貧乏神」「大歳の火」「笠地藏」「大歳の亀」
「物言う動物」

「八、運命の期待」「九、婚姻」「十、至福」で、人間社会にお
ける幸せを求める説話が続いたのに対し、人間社会での「葛藤」
を次に置くという意図であろう。しかしこのA、B、Cを概観
したとき、これを一つに「葛藤」としてまとめたことで、体系
が捉えやすくなっているかという点、いくつかの疑問は残る。

まず、「A、親と子」は『集成』では「継子譚」という見出し
であった。関はずでに『集成第二部本格昔話二』の序において、
「継子譚は親と子、可憐な乙女と冷酷な継母との葛藤、あるいは
この乙女を通しての母の死霊ないしはヘクセと継母との葛藤が主
たるモチーフである」と述べており、早い時期から「継子譚」
は葛藤譚に整理できると考えていたようである。ただ、「鉢かつ
ぎ」「灰坊」「継子の栗拾い」などはいずれも継子が孤立的な主人
公として家を出て幸せな結婚をするが、家を出てからは継母は全
く出てこないため、必ずしも親子の葛藤がテーマとは言いにくく、
見出しとしては「継子」のほうがわかりやすいように思う。

また「B、兄（姉）と弟（妹）」については、『集成』からす
でにあった問題であったが、兄と弟の葛藤でまとめたために、
「山梨取り」のような彼岸世界との接触がテーマとなる説話と

「馬鹿でも総領」のように、彼岸世界とは関係のない笑話のよう
な説話がいつしよになつていいる。

「C、隣人」は『集成』の「隣の爺」と「大歳の客」がひとつ
にまとめられている。

「地藏浄土」から「見るなの座敷」までが「隣の爺」で、「猿
長者」から「もの言う動物」までが「大歳の客」に含まれてい
た。たしかに「大歳の客」も隣人が模倣して失敗するので、「隣
人との葛藤」という見出しでまとめられているが、異郷を訪問
する説話と、彼岸者が訪れる説話という区分は明確なので、下
位区分としては分けておいてもよかつたように思う。

「葛藤」という分類には問題があることを小澤俊夫も次のよう
に述べている。

A親と子に「唄い骸骨」が属しているが、これは親子関係
ではなく、友人関係である。また「宝手拭」は隣人関係で
はなく、主従関係である。このように、登場人物によって
くくると、どうしても細部では矛盾が生じるのである。

一方、葛藤という概念も、行動を示すものではなく、関
係を示す概念であるから、内容に混乱が生じやすい。「奈良
梨取り」は兄弟の話ではあるが、兄弟間の葛藤を語ってい
るわけではない。末子成功譚なのである。¹⁹⁾

「葛藤」を概観していると、彼岸世界との接触について語られ
ないものがいくつかあることに気づく。たとえば「A、親と子」

「皿々山」もそうだし、先ほどの「馬鹿でも総領」もそうであった。このことについては、関の次のことばから、関の本格昔話の分類基準が、彼岸との接触だけではないことが見て取れる。

これら本格昔話の内容は婚姻を目的とした彼岸の世界への旅行である。筋の運びは相互に関連をもつ現世と彼岸との間の緊張からなる。昔話に現れる彼岸の世界は明らかに選ばれた者の冥府であり、輝かしい楽土であり、幸福の島である。これらの話の今一つの特徴は二元的であるということである。これは隣の爺型に最もよく表現されている。兄弟譚、継子譚もまたこれに属する。善と悪、愛と憎悪、美と醜、正直と狡猾、長者と貧乏人、人と動物、これらが相互に対立し闘争する。これらの対立抗争における成功と失敗とは何れも同様な表現形式をもつて語られ、聴き手をして共感に導く。²⁰

つまり、関は、本格昔話にとつて、彼岸世界との関わりが重要な場合と、善と悪などの二元的対立が重要な場合の二通りを考えていることがわかる。したがって、彼岸との接触がある説話に加え、それに類する二元的対立のある説話を加えていったようである。

「狡猾者」「おどけ者」「業較べ」「和尚と小僧」「偶然の幸福」「愚人譚」最後に『集成』で笑話に分類されていたものについて、ごく

簡単に述べたい。

『集成』では「愚人譚」「誇張譚」「巧智譚 A 業較べ」「巧智譚 B 和尚と小僧」「狡猾者譚 A おどけ者」「狡猾者譚 B 狡猾者」の順で配列されている。「昔話の型」ではこれがちょうど逆に配置しなおされている。「狡猾者」「おどけ者」「業較べ」「和尚と小僧」「偶然の幸福（＝誇張譚）」「愚人譚」という並びである。また『集成』の「愚人譚 愚かな男」は、『昔話の型』の「十三、おどけ者」「十七、愚人譚 A 愚か者」「十七、愚人譚 B あわて者」に振り分けるなど、個々の説話についても整理しなおしている。

五、結び

全体を通してみると、「日本昔話の型」によつて、『集成』の配列が大幅に見直され、動物の由来、動物同士の説話、人と動物（超越的存在）との説話、人間社会での幸せ、人間社会での葛藤、笑い話、という配列になり、各説話群の関係がわかりやすく、説話群の繋がりが大きく改善された。

「日本昔話の型」の評価と問題点を小澤俊夫は端的にまとめているので、最後に引用する。

関の「昔話集成」に示された分類は三分類の利点はあるが、全体をまとめるには未だしの感がある。ところが、「日本昔話の型」では、長足の進歩をとげた分類案が提示され

ている。そこにはまだ、個々の話型を組み入れる際の不手際があるが、出来事を主とし、固着性のあるばあいのみ登場者によって分類しており、有用な分類と認めることができる。しかし、構造的な把握を入れていないための弱点も認めないわけにはいかない。

とまれ、従来日本においてつくられた分類のうちもっともすぐれたものといえる「日本昔話の型」が「昔話大成」において全国的採用されず、従って研究者の間で使われていないのは、残念である。⁽²⁾

注

- (1) 関敬吾『日本昔話大成第十一卷』一九八〇 角川書店 三九二—三九三頁。
- (2) Keigo Seki: Types of Japanese Folktales, Asian Folklore Studies, Vol. XXV (1966), 二頁。
- (3) 関敬吾『日本昔話集成第一部動物昔話』一九五〇 角川書店 一二頁。
- (4) 関敬吾『日本昔話集成第一部動物昔話』一九五〇 角川書店 五〇—五一頁。
- (5) 関敬吾『日本昔話集成第一部動物昔話』一九五〇 角川書店 五八頁。
- (6) 関敬吾『日本昔話大成第二卷』一九七八 角川書店 二頁。
- (7) 関敬吾『日本昔話大成第七卷』一九七九 角川書店 九頁。
- (8) 小澤俊夫『小澤俊夫東京講演会Ⅱ 柳田国男と関敬吾』二〇一四 小澤俊夫著、小澤俊夫補訂『日本昔話の型』二〇一三 小澤晋
ばなし研究所 一二二頁。
- (9) 小澤晋ばなし研究所 CD 2 (二七分頃から)。
- (10) 関敬吾『日本昔話集成第三部笑話2』一九五八 角川書店 四〇九—四一〇頁。
- (11) 関敬吾『日本昔話集成第三部笑話1』一九五七 角川書店 三頁。
- (12) 関敬吾『日本昔話大成第十一卷』一九八〇 角川書店 三九二頁。
- (13) 関敬吾著、小澤俊夫補訂『日本昔話の型』二〇一三 小澤晋ばなし研究所 四頁。
- (14) 関敬吾『日本昔話大成第二卷』一九七八 角川書店 六頁。
- (15) 関敬吾『日本昔話集成第二部本格昔話1』一九五三 角川書店 三頁。
- (16) 関敬吾『日本昔話集成第三部笑話1』一九五七 角川書店 三四頁。
- (17) 関敬吾『日本昔話集成第一部動物昔話』一九五〇 角川書店 五九頁。
- (18) 関敬吾『日本昔話大成第一卷』一九七九 角川書店 八頁。
- (19) 関敬吾『日本昔話大成第二卷』一九七九 角川書店 三頁。
- (20) 関敬吾著、小澤俊夫補訂『日本昔話の型』二〇一三 小澤晋ばなし研究所 一三〇頁。
- (21) 関敬吾『日本昔話集成第二部本格昔話1』一九五三 角川書店 五頁。
- (22) 関敬吾著、小澤俊夫補訂『日本昔話の型』二〇一三 小澤晋ばなし研究所 一二二頁。

(かとう・こうぎ／学習院大学)